

Council for Exceptional Children 年次総会参加及び テキサス盲学校訪問についての報告

齊藤 由美子*・熊田 華恵**

(*企画部) (**教育研修・事業部)

要旨: 2013年4月3日～6日、筆者らはアメリカ合衆国のテキサス州サンアントニオで開催された CEC の年次総会に参加し、日本の特別支援教育の現状に関するポスター発表を行った。また、米国や世界の Special Education, 特に、重複障害教育、盲ろう教育に関する最新の研究動向についての情報を得た。さらに、テキサス州オースティンにあるテキサス盲学校を訪問し、視覚障害・知的障害を伴う重複障害の子どもへの教育や、盲ろうの子どもと家族へのサービス提供について、見学・聞き取りをする機会を得た。本論ではその概要を報告する。日本の今後の重複障害教育、盲ろう教育への多くの示唆を得るとともに、日本から諸外国に向けての情報発信の必要性和国際的な情報交流の意義を確認した訪米となった。

見出し語: Council for Exceptional Children, テキサス盲学校, 重複障害, 盲ろう

I. Council for Exceptional Children 年次総会への参加

1. Council for Exceptional Children 年次総会の概要

Council for Exceptional Children (CEC) は、障害のある子ども及びギフティッド（生まれつき才能がある、優れた知能を持つ）の子どもに関する学会としては、世界最大の学会である。CEC の会員は、アメリカ合衆国を中心に、世界各国に約50,000人いると言われている。

2013年4月3日～6日、筆者らはアメリカ合衆国のテキサス州サンアントニオで開催された CEC の年次総会に参加した。今年度の年次総会には、研究者、教員、行政関係者、PT・ST などの関連職、保護者、当事者等、4,000人以上の参加者があった。開催期間4日間で1,000を超える数のセッション（ポスター発表、口頭発表、ワークショップ、デモンストラレーション等）が行われた他、200の会議やイベントが催された。カナダをはじめ、南米、アジア、アフリカ、ヨーロッパの様々な国と地域からの参加者も多く見られた。

2. 日本の特別支援教育の現状に関するポスター発表

筆者らは、日本における特別支援教育の現状に関するポスター発表を行った。日本の特別支援教育に関する情報、特に、2007年の制度改正とそれ以後の展開に関する情報については国際的にあまり知られていないため、日本の特別支援教育のシステムやコンセプトには多くの関心が集まった。

質問があったのは、特別支援教育対象の児童生徒数が増加している理由、義務教育修了以降の障害のある生徒の教育的処遇、交流及び共同学習のコンセプトとインクルージョンの理念に照らした有効性等である。また、日本の「発達障害」の定義についてはわが国独自のものであり、国際的な Developmental Disabilities の定義と異なるため、多くの説明を要した。

インクルージョンへの志向は国際的な動向であり、今後、日本が目指すインクルーシブ教育システムの構築に向けて、アメリカ合衆国、中国、台湾、韓国の研究者と情報交換やディスカッションができたことは、大きな収穫であった。



写真1 日本の特別支援教育の現状に関するポスター発表の様子

3. セッションへの参加と情報収集

筆者らが参加した様々なセッションでは、最新の研究動向や情報を得ることができた。そのうちのいくつかの概要を紹介する。

1) サービスへのアクセスが困難な家族へのサポート体制

米国では、障害のある、または障害となるリスクのある0～3歳の乳幼児とその家族に対して、個別の家族サービス計画（IFSP：Individualized Family Service Plan）が作成され、計画に基づいた早期介入サービスが提供される。しかしながら、中にはこれらのサービスの対象となる可能性がありながら、取りこぼされている家族が存在する。例えば、社会的に孤立状態にある家族、情報をもたない家族、ホームレスの状態にある家族、英語を母国語としない家族、また、保護者に知的障害や精神的な疾患がある場合や、保護者が子どもを虐待している場合、等である。このような状態にある家族を早期に発見し、サービスの対象となるかどうかを診断し、早期介入サービスを効果的に提供するための戦略について、研究報告があった。戦略の例としては、コミュニティにおける連携の仕組みづくりの強化や、家族が必ず買い物に立ち寄る店舗内での情報提供や相談の場作りなどがあげられた。

ディスカッションでは、早期介入専門家（Early Interventionist）のケースワークの重要性について議論された。

2) 重度障害や健康障害がある子どもの教育的QOL

重度障害や健康障害がある子どもは、多くの専門職からのサポートを必要とし、医療サービスを要するケースが多く、日常生活における活動の制約や保護者の負担感が大きい傾向がある。

ディスカッションでは、教育的QOLを高めるために、教師と専門職の連携がより重要であること、保護者の負担感を軽減する医療サービスの提供の仕組みづくり、活動の制約をできるだけ少なくするユニバーサルな環境づくり、それぞれの教育の場において障害のない子どもたちとの活動を保障すること、等が議論された。

3) 重複障害がある子ども・盲ろうの子どもの教育に関するウェブによる情報発信

パーキンス盲学校の教師と研究者によるセッションでは、視覚障害を伴う重複障害のある子どもや、盲ろうの子どもの教育に関する情報を発信するウェブサイトの紹介が行われた。Wonder Babyというウェブサイトでは、視覚障害のある乳幼児を持つ保護者のために、Q&Aや、子どもとの生活に役立つ情報記事、新製品やおもちゃ、本などの紹介が行われている。情報記事のコーナーで紹介されている内容は、様々な感触の布を組み合わせたキルトの作り方と使い方、日常生活の様々な場面における視覚障害のある幼児への環境調整、子どもが「暖かい」と「冷たい」を体験する遊び、等々、大変具体的で実践的な内容である。また、Path to Literacyは教師向けに具体的な教育実践のヒントを紹介するウェブサイトである。「リテラシー」を文字や点字の読み書きという定義に留まらず、具体物、絵、シンボル等、言語を広義に捉え、それらを用いたコミュニケーションを子どもの状況に合わせて実践する方法を具体的に示している。これらのウェブサイトでは利用者との双方向的なやり取りも可能である。

ディスカッションでは、低発生頻度障害に関する情報発信の重要性と今後のウェブサイトの展開と可能性について、参加者を交えた議論がなされた。

4) インクルージョン推進に関する国際パネルディスカッション

米国、メキシコ、イスラエルの研究者が企画した国際パネルディスカッションでは、障害者の権利に関する条約の批准に向けた国連の取組、障害者の権利に関する条約が世界各国において、現在の教育システムを取り巻く社会的、文化的問題にいかに関与を与えるか、また、雇用、家族、健康、通常教育の場における教育サービスの提供、人材育成などとの関連などについて、フロアも参加してのディスカッションが行われた。最後に、国際的なインクルージョンの定義の理解として、インクルージョンとは場を指すのではなくプロセスであり哲学であること、平等なサービスへのアクセスを限りなく目指すことの重要性、等が参加者を交えて確認された。

Ⅱ. テキサス盲学校訪問

今回の訪米では、CEC 学会終了後、テキサス州オースティンにあるテキサス盲学校を訪問し、知的障害を伴う重複障害の子どもや、盲ろうの子どもの教育実践を見学する機会を得た。一人一人の子どもが持っている力やニーズに合わせたコミュニケーションの方法や、校内、教室のわかりやすい学習や生活環境の整備、学校で働く様々な職種間の連携と情報の共有など、参考となる多くの情報を得ることができた。

1. テキサス盲学校の概要

テキサス盲学校は、州立で州内唯一の視覚障害に対応する特別学校である。視覚障害、視覚障害に加えて他の障害がある子どもの特性的な学習ニーズに焦点をあてた、専門的・集中的なサービスを提供することを目的としている。サービスは子どもの状況に合わせて提供される。寄宿舎に入り高等学校卒業までの学習を行う子ども、短期プログラムで地域の学校で学習するための力を身につけて地域に帰る子ども、大学進学など更なる高等教育や職業教育・地域社会での生活を目指して移行準備をする子ども、等、様々なプログラムが準備されている。

特徴的なのは、学校のこれらのプログラムが、学校に在籍して学んでいる百数十名の子どものためではなく、テキサス州内の4,000人あまりの視覚障害のニ

ーズのある子どもたち（重複障害と盲ろう含む）とその家族のために機能していることである。そのため、テキサス盲学校では、学校教育にとどまらない幅広い領域の仕事にそれぞれのスタッフが携わっている。小学校から高校までの教育プログラム、1～3か月程度の短期プログラム、夏季プログラム、卒業プログラム、移行プログラム等の各教育プログラムに携わるスタッフの他、カリキュラムの開発、保護者支援、就労支援、点字ライブラリー、インターネットによる遠隔教育、地域での支援、盲ろうプロジェクト、ワークショップと会議、等、幅広い領域で専属スタッフが働いていた。また、様々な子どものニーズに応じるため、視機能の専門職、方向定位と移動の専門職の他、聴覚検査や補聴器等の専門職、ST、PT、OT等の専門職も勤務している。



写真2 テキサス盲学校の外観

2. 学校における教育実践と提供されるサービス

テキサス盲学校では、視覚障害・知的障害を伴う重複障害の子どもや、盲ろうの子どもの教育について、見学・聞き取りをする機会を得た。一人一人の子どもが持っている力やニーズに合わせたコミュニケーションの方法や、校内、教室のわかりやすい学習や生活環境の整備、学校で働く様々な職種間の連携とサービスの提供など、参考となる多くの情報を得ることができた。

1) 重複障害がある子どもにわかりやすい環境

校内の廊下を案内されて歩いているときに気づくのが、重複障害のある子どもたちが学習する主な部屋の入口と、その向かい側の廊下の壁に設置されて

いる「触ってわかる部屋の手がかり」である。視覚障害・知的障害を伴う重複障害のある子どもにとっては、目指す教室に移動する際の手がかりとなっている。部屋と反対側の壁伝いに歩いていても、手がかりによって向かい側に目指す部屋があることがわかる。また、触ってわかる大きな動物の絵が、芸術的なオブジェになるとともに、建物内で今自分がどこにいるかを示す手がかりとなっていた。



写真3 部屋の入口の手がかり



写真4 部屋の向かい側の壁にあった手がかり



写真5 触る絵画

2) 一人一人の子どものニーズを考慮したコミュニケーションの手段

視覚障害、自閉症、知的障害を併せ有する高校生の朝のカレンダーワークを見学した。担当していたのはSTである。この1時間程度のセッションでは、月カレンダーに貼られた点字のカードを読み取って、「月の予定」(曜日と主な学習内容、イベント、帰宅予定など)を確認した後、「今日の予定」を自分で確認しながら点字カードで構成し、確認した内容を点字タイプライターで打つ、という内容の学習が行われた。対象生徒は、STと音声言語と触手話でやり取りをしながら、時に歌などを交えて、楽しくカレンダーワークに取り組んでいた。

この生徒が点字を理解しこの学習に意欲的に取り組むようになったのは、ここ1年くらいのことだという。それまでは、かなり自傷行動が激しく、生徒から発する音声言語はほとんどなかった、とのことであった。点字の理解が進むとともに、音声言語も増えていったが、彼の成長には、この繰り返し毎日行っているカレンダーワークの影響が大きかったという。



写真6 視覚障害、自閉症、知的障害を併せ有する生徒のカレンダーワークの様子

この学習室では、この生徒以外にもカレンダーワークを行う子どもが2名いる。コミュニケーションの手段はそれぞれ異なり、一人はオブジェクト(実物)を用い、もう一人は写真カードを用いている。学習室には、それぞれの子どものコミュニケーションの環境を整えた学習スペースが準備され、また、

国際会議・外国調査等の報告

学習の目標や手順がわかりやすく掲げられていたことが印象的であった。



写真7 子ども一人一人のコミュニケーションの手段を整備した学習スペース

3) 将来の生活につながるキャリア教育

見学の途中で立ち寄った校内のコーヒーショップでは、弱視の女子生徒がおいしいコーヒーを入れてくれた。学校のマスコットの名前がついたこのコーヒーショップは、学校のスタッフや生徒が利用している。外部資金によって立ち上げたキャリア教育プログラムの一環で、この女子生徒も「バリスタになりたい」という夢を実現するために、ここで働いてトレーニングを受けているという。



写真8 キャリア教育プログラムの一環で行っている校内のコーヒーショップ

同様のキャリア教育プログラムは他にもある。例えば、寄宿舍から学校に通う子どもの保護者や外部

からの訪問者が、来校したときの宿泊施設が整っており、ここでは、ホテルのベットメイキングや洗濯、掃除などの仕事のトレーニングを行っている。また、週末だけ開店するビストロが校内にあり、ここではレストランなどで働くためのトレーニングができるということであった。



写真9 保護者や来校者のための宿泊施設

4) 盲ろうの子どもと家族のためのプロジェクト

盲ろうプロジェクトは、視覚障害と聴覚障害の両方を持つ子どもの家族や、子どもと関わる教師、専門職に、必要な情報と研修を提供するプロジェクトである。テキサス州内の0歳から21歳までの盲ろうの子どものニーズに対応するプロジェクトであり、国レベルの外部予算によって運営されている。

このプロジェクトでは、毎年、州内の盲ろうの子どもたちの状況に関する統計データを集約しており、そこで新たに盲ろう教育のニーズがあることを把握した子どもと家族にも、必要な支援を提供する仕組みとなっている。

盲ろうの子どもは数が少ない上に、一人一人の状況に合わせた専門性の高い対応が必要となるため、地域の教育事務所では、盲ろう教育に関する知識や技術の蓄積が難しい。このプロジェクトには、専門性のあるスタッフが9名おり、テキサス州内の盲ろうの子どもがいる家庭や学校、地域の教育事務所などに outward、関係者へのコンサルテーション、トレーニング、教材の提供、移行支援等を行っている。0歳から5歳までの保護者を中心にした対応と、6歳から22歳までの教育に関する対応では、専門性が異なるためスタッフも分かれているとのことであっ

た。最近力を入れているのは、教育場面で盲ろうの子どもへの通訳や介助を担当する「インターヴィナー」のトレーニングであり、経験のない方を対象にトレーニングを行い、盲ろうの子どもの通訳・介助ができる人の数を増やすことが課題である、という話を伺った。

Ⅲ. 訪問を終えて

CEC の年次総会は、毎年4月初旬に開催される。今回の参加では米国や世界における多くの最新情報を得ることができたが、交流した研究者からは、「日本からの参加は、中国、韓国、台湾などのアジアの近隣諸国に比べると少ないので残念だ」という声が聞かれた。改めて、日本から諸外国に向けての情報発信の必要性と国際的な情報交流の意義を確認した訪米となった。

また、テキサス盲学校では、重複障害のある子どもが学び生活するための環境設定や教育内容について多くの情報を得た。日本においてインクルーシブ教育システムが進んだ際の特別支援学校の役割やその在り方を考えるとき、テキサス盲学校における専門性の集約の仕方とサービス提供の仕組みは、大変示唆的であった。さらに稀少障害である盲ろうの子どもや家族へのサービスを学び、日本において今後検討すべき課題であることを改めて確認した。

参考文献

Blaha, R. (2001). Calendars for students with multiple impairments including deafblindness. Texas School for the Blind and Visually Impaired.



写真10 CEC 会場の Henry B. Gonzalez コンベンションセンターにて参加者の教員・研究者との交流